

語数から見た修飾構造 (単位%)

Words \ Texts	<i>Cloud</i>	<i>London</i>	<i>Rolle</i>	<i>Mandev.</i>
2 語	48	59	71	44
3 語	42	41	24	47
4 語以上	10	0	5	9

がわかる。*London* も三語の場合は多いが、四語以上の長い構造は無く、せいぜい三語どまりであり、*Rolle* は二語修飾を主流とした比較的短い構造が多いといえよう。

また一主要語にかかる修飾語の数から言って実際にどの程度の語の積み上げが見られるのか、そのもっとも多いものを拾ってみると、

soche a deuote & a meek blynde stering of loue (22) an hundrid pousand  
soche swete wordes as ben pees (143) the seyde blessed t gloriouse virgine  
Marie (M1)

などがあり、更に次の *Mandev.* の例は主要語の前に冠詞を含めて二語、後に四個の語句が長々と連っている。これは先にも述べたように後位置のそれは、限定語句というよりは叙述的なものと解した方が妥当かも知れない。

Bethleem is a lityll cytee long t narwe t wel walled t in eche syde  
enclosed with gode dyches. (M45)

5.1. 以上、*Cloud* を中心に散文における形容詞の修飾構造の種々相を見てきたわけであるが、*Mandev.* がかなり変化に富んだ修飾構造、更にはその特異な分布状況を示すのに対して、*London*、それから *Rolle* がどちらかと言えば型にはまった感じで、それらを両極とする中間に *Cloud* が位置するといった図式が描かれよう。

始めにも述べたように、これが韻文になると語の配置に更に変化が予想されるが、例えば Chaucer の場合には、彼の散文には見られない NAA, A Proper N the A, AANA と言った構造がその韻文には現われる<sup>13)</sup>。そして、これらはまた今回対象とした散文にも見られない。このあたりに Chaucer の韻文の技巧の一端が窺い知れるのである。

今回の調査からこの問題に限って言えば、韻文においては、主に語の配置に多様な変化が見られるのに対して、比較的制約の少ない散文では一主要語に対してかかる修飾語句の量の多様さにその特質・特色が見られるということができよう。

13) Cf. Ibid., pp. 121-2.

各型の全体に占める割合 (単位%)

Types \ Texts		Cloud		London		Rolle		Mandev.	
I	AAN	57	88	52	78	54	74	19	33
	A&AN	31		26		20		14	
II	ANA	9	10.5	16	22	12	24	5	56
	ANA&A	0		0		12		6	
	AN&A	1.5		6		0		45	
III	NA&A	1.5	1.5	0	0	2	2	11	11
総 頻 度 数		124		31		41		63	

いう<sup>10)</sup>。この観点から更に *Mandev.* の II と III を合わせると I に比べて二倍を越す高率となる。つまり、形容詞の後置が非常に多いという特異性が指摘されるであろう<sup>11)</sup>。また II の内容を見ると AN&A 型が異常に高い率を示している。この型は *Cloud* と *London* にそれぞれ、わずかに二例ずつ出てくるだけであることからすると、極めて特徴的な現象と見てさしつかえなかりう。もともと *Mandev.* はフランス語で書かれたものであり、更に今回の調査で使用したテキストは原典のフランス語からの直接の翻訳である Cotton MS からの編纂であることから、そこに幾分かの影響が考えられるところである。

次に一つの主要語にかかる修飾語の数を、先に直接の考察の対象からはずした語 (determiners, 'such') をも含めて見てみると次表のようになる<sup>12)</sup>。

この表からすると、*Cloud* と *Mandev.* はほぼ同様の傾向を示し、一主要語に対し、三語以上の修飾語を積み重ねるといった比較的長い連続が多いこと

10) Cf. F. Mossé, *A Handbook of Middle English*, trans. J. A. Walker (Baltimore: The Johns Hopkins Press, 1952), § 166.

11) この事に関して、時代は異なるが、1200年頃の作とされる韻文 *Ormulum* における限定形容詞の語順の統計がある。基準その他が異なるので正確な比較はできないが、そこに示された数字から勘算して限定的に用いられた一般形容詞 (general adjective)・過去分詞が後置される割合は大体 6.5% 位になるようである。限定形容詞・分詞が二語以上という制約の上に立つ上記 *Mandev.* の数字はその点これと比較する場合には相当の割引が必要であろうが、相手が韻文である点を合わせ考え、尚その特異性が浮かび上ってくるであろう。(Cf. R. A. Palmatier, *A Descriptive Syntax of The Ormulum*, [The Hague. Paris: Mouton 1969] pp. 105-124.) 更に、OE の散文 *Pastoral Care* では、やはり同様に本論の基準からすれば、形容詞が後置されるのは七例のみである。(Cf. W. H. Brown Jr., *A Syntax of King Alfred's Pastoral Care*, Series Practica 101 (The Hague·Paris: Mouton 1970) 2.1.5

12) 但し、ここでいう二語には 'determiners + A + N' のような型は資料採取の段階から除外したのでここには含まれない。また、冠詞は一主要語に対し二度以上反復されている場合は一度のみ勘定する。

冠詞が付加されている。この冠詞の有無がこれら二つの構造の決定的な違いであるように思われる。 $A_1NA_2\&A_3\&A_4$  における  $A_3, A_4$  は  $A_2$  と並列の関係にあり、従って後置形容詞の累加的な列挙であり、先にも触れた nexus 関係を底流に叙述的要素を強めるのであろう。一方、夫々に冠詞を伴う  $A_1N\&A_2\&A_3$  の場合、当然  $A_2, A_3$  は前置された  $A_1$  と並列の関係にあるものであり、その各々を支える  $N$  の存在を感じさせるような、かなり独立性の強い、並行的な列挙であるように思われる。いずれにしろ、今少し広範な資料の検討を要するところである。

A&AN&AN: the best t most worthi lond t the most vertuouse lond of all the world (M1)

この場合の三つの形容詞の主要語はいずれも 'lond' であるが、それが最初の形容詞には省かれ、後の二つには反復されている。これはやはり冠詞との関連から見れば、明らかに 'best' と 'most worthi' が最初の 'lond' に対して並列的に配置されたものであるが、 $N$  が同一であることを考慮すれば、いわば A&A&AN 型の変形と考えられないこともない。

ANtheN: oure lige lord the kyng (L31, 37)

これはいわゆる同格構造である。同格関係を修飾構造の一種と見るか否かは問題であるが<sup>9)</sup>、普通名詞のそれに限ると上記同一例が *London* に二回出るのみである。

5.0. 以上、名詞修飾構造の様々な型について見てきたが、ここではまとめる意味でそれらの大体の分布を把握することによって *Cloud* を中心とした四つの散文間の異同を眺めることにする。

まず、大きく分けて主要語である名詞を中心にして、その修飾語が前置されるもの(I)、前後に配置されるもの(II)、後置されるもの(III)の三種にまとめてみると、その分布は概略次頁の表のようなものとなる。

*Mandev.* を除いては I~III の順に頻度が低くなっている。特に *Cloud* においては形容詞前置型がほとんど九割に近い比率であるのに対して、*Mandev.* に関しては修飾語を主要語の前後に配する型がもっとも多い。Mossé によると十四世紀散文における限定形容詞の 'normal position' は名詞の前位置であると

9) Cf. C. Sprockel, *The Language of the Parker Chronicle* Vol. II, (The Hague: Martinus Nijhoff, 1973) p.86.

3.1. 'and' で結ばれた二個の形容詞が主要語の後位置に置かれた NA&A 構造が *Cloud* では唯一の型である。それも頻度は極めて低くわずかに次の二例を数えるだけであり、その内の一例は後位置が多い分詞である。

alle sinners treuly turned & clepid to pe grace of contemplacion (6)  
pinges leueful & actyue (162)

他のテクストの状態を見てみると、*London* にはなく、*Rolle* に一例と、大体 *Cloud* に似た傾向を示すが、唯一つ、*Mandev.* には6例も見られその分布に偏りが見られる。

all thi werkes gude & ill (R44) god glorious t allmyghty (M4) the palays  
of the Emperour right fair t wel dyght (M11) a bird quyk t parfyt (M30)  
•xliiij• pyleres of marble grete t faire (M45) the stone gret t large (M60)  
the water gret t large (M69)

4.0. 以上、*Cloud* に見られる構造を中心に見てきたが、その他に *Cloud* には見られないが他の三テクストに出てきたものを以下に列挙する。

A&A&AN: For he maketh to come before him the fairest t the nobleste  
of birth t the gentylleste damyseles of his contree (M24); AANA&A:  
grete huge cytees manye t fayre (M27); ANA&A: alle thi gude dedis  
bodyly and gastely (R3) per ware nane erthely thyng sa dere ne so nedfull  
to hym (R45) ANA&A&A: a fayr castell strong t gret t wel set vpon a  
roche (M21) Bethleem is a lytill cytee long t narwe t welled t in eche  
syde enclosed with gode dyches (M45)

M45では四つのAが後置され、各々が接続詞によってつながれているが、Nとの距離が遠くなるにつれて後置された形容詞は限定的というよりもむしろ叙述的な色合いが濃くなり、特に最後の分詞には、それ自体にかかる前置詞句が前後に配置され一層その感が強い。

AN&A&A: a full fair cytee t a gode t a wel walled (M10) cypre is right  
a gode lle and a fair t a gret (M17)

これは AN&A に更にAが後に付加された型であり *Cloud* にはその例はなく、わずかに *Mandev.* に上記二例が見られるだけである。前述の ANA&A(&A) と、主要語の後にいくつものAが付加されるという点で極めてよく似ているが、例えば同じテクストの例、M21, M45 と上記の二例を比べて見ると、接続詞の位置による構造の相異は別にしても不定冠詞に関しての異同が注目される。つまり、どちらもNに対して前置されたAは不定冠詞を伴っているが、後置されたAは前者では不定冠詞を全く伴わないのに対して、後者ではその各々に不定

その他, *Rolle* ではなく, *London* では次の例が二ヵ所に見られる程度である。

good name & able (L54)

ANA の後置形容詞が上述のようにほとんど分詞であるのに対して, この場合の後置された形容詞の中には分詞は唯一例あるだけで, それも次の例に見られるように二個連続して置かれた場合の後位置に見られるだけである。

a full fair cytee t a gode t a wel walled (M10)

先に見た A&AN 型と単に形態上から比較した場合, 単なる N の移動にすぎないが<sup>7)</sup>, この両者の間に何らかの意味的・文体的差異があるのかどうかは, K. Brunner も言うように判然としない<sup>8)</sup>。しかし, 上掲の *Mandev.* の例の中に少くとも一つの方角を示唆するようなものがある。M61 と M70 がそれである。つまり, この両者において二つの形容詞 'faire' と 'strong' が同じ主要語をもつ同じ構造の中に入れかわっている。各々の文脈を見てみると,

And the cytee is strongere on pat syde pan on pat other syde For at the foot of the mount Syon is a faire castell t a strong pat the soudan leet make.

Also fro the dede see to gon estward out of the marches of the holy lond pat is clept the lond of proysioun is a strong castell and a fair in an hill pat is clept CARAK EN SARMOYZ, pat is to seyne Ryally.

この両者を対比しつつ見てみると, 前者は前に 'strongere' という語があることから自明のように, 城のもつ守備の堅固さという機能に重点が置かれた記述であるのに対して, 後者ではその力強さをも含みながらも丘に聳える城の威風といったものに主点を置いた描写であると言えよう。してみると, 接続詞で遊離された後位置にある形容詞をいわば独立させることによってある効果を狙う, つまり, 後置形容詞に力点を置いた強調の一形式と考えられないこともない。しかし, 後者においては下線部に続く前置詞句 'in an hill' は下線部全体にかかると考えられるが, 'fair' にのみにかかることも可能である。そしてそれ故にこの場合, 'fair' が後置されているにすぎないという見方も成り立つが, それとても必ずしも今述べた推論を否定するものではないであろう。

3.0. 主要語にかかる形容詞修飾語句がすべて後置されるものについて見てみると, *Cloud* では極めて稀である。

7) 内容的には ANA とはいささか趣きを異にする。何故ならこの場合の A は圧倒的に分詞であるからである。

8) Cf. K. ブルンナー『英語発達史』(大修館, 1973.) p. 450 但し, 彼はこの場合, ANA 型と AN&A 型を区別せずに論じているがこれは妥当でない。

(123) any longe sauter vnmyndfully mumlyd (75)

pe nexte zeer folwynge (L48) fals compassement & ymaginacion to-forn  
cast (L26) paire euyll lyfe be-fore done (R45) the most worthi lond most  
excellent (M1) a little cloth all bloody (M71)

注目すべきことは、この型における後置形容詞は、例えば Chaucer では、‘the longe nyghtes *blake*’ や ‘sodeyn deth *horrible*’ などのように一般の形容詞もふつうに見られるのに対して、今回の資料の中ではそのような例はただ一例のみで、他はすべて分詞であるということである。これは Chaucer の場合、押韻の関係やフランス語の影響などもその一因かと思われるが、極めて特徴的なことと言えよう。

主要語Nの接触位置に後置される形容詞Aがほとんど分詞であるという事実は ModE の場合と全く一致する。分詞の有する動詞性と相俟って、後置された分詞は主要語を主語とする述語的な色彩を濃くし、そこにいわゆる nexus 関係が存在することになるのである<sup>6)</sup>。

尚、この点に関して、本稿では一応除外した ‘determiners’ との結合では後置された一般形容詞の例は次のようなものが見られる。

a ·iij· iorneyes long fro the see (M81) oure hertys erre ferre fra Hym  
(R11) all my requestes resonable (M54) eny swych vitailier straunger (L33)

前二者は後続する前置詞句との関連から後置は必然的であり、残り二つにおける形容詞はいずれもフランス語系であるということに関連があるものと考えられる。

2.2. 次に後置された形容詞と主要語との間に接続詞 ‘and’ が介在する AN &A 型について見てみる。

serue God in bodely besines & goostly to-gedir perfitley (53)

これは更に前置形容詞を重ねた型も見られる。

What weri wrechid herte & sleping in sleupe is pat (14)

*Cloud* にはあと数詞の例 (seuenty chapitres & fiue) が一例あるだけで比較的稀れであるのに対して、この型が *Mandev.* に多く見られるのが注目される。

a gret lord and a myghty (M4) the most fayr chirche t the most noble  
of all the world (M5) faire verres t clere (M19) a gay cytee t a riche (M20)  
a full drye lond t lityll of fruyt (M29) a faire castell t a strong (M61) a  
strong castell and a faire (M70)

---

6) Cf. R.W. Zandvoort, *A Handbook of English Grammar*, (Tokyo: Longmans and Maruzen, 1965), 702-703; 毛利可信『語順』(研究社 1954.) p. 51

any good & clene goostly ping vnder God (35) good & onest bodily werks  
of mercy & of charite (53)

この構造における三つの形容詞の配置を意味との関連から見てみると、接続詞 ‘and’ に直接接触している二つの形容詞は何らかの意味で同質であり、残る一個はこれらとはやや異った性質のものである場合が多い<sup>5)</sup>。例えば上掲の例 ‘diuerse ful feire & wonderful pointes…’ では ‘feire’ と ‘wonderful’ は等質であるのに対し、‘diuerse’ はそれらとはやや質を異にする。

一方が否定される場合には、それは後部に置かれ、ここではその方法に二種類が見られる。つまり、そのまま ‘not’ で否定する場合と接続詞にその意を込める場合とである。

全体的に見た場合、この型は *Cloud* には多いが、他のテキストには合わせて数例という偏りを示すが、テキストの分量の多寡を勘案してもその頻度の差は大きいように思われる。

*Cloud* 以外の例では、

moost worthy moost ryghtful & wysest lordes & conseil (L37) vnne-  
ful & vnleueful dyuerse doynges (L36)

前者においては形容詞最上級の並列であるが、相互に接触する二連の形容詞それぞれに ‘moost’ を伴っている点、この二つの形容詞の間の不連続性を暗示するものと考えられなくもない。

以上、接続詞を含む前置形容詞三個の配列を見たが、この構造における四個配列の例はない。しかし、次の *Mandev.* の例における ‘virgine’ の取り扱い方によってはこれが AA&AAN の唯一の例となる可能性もある。

the seyde blessed & gloriouse virgine Marie (M1)

2.0. 主要語Nを中心にして複数個のAをその前後に配する構造で、後置されたAの位置によって二種類に大別される。

2.1. まず主要語の前後の接触位置にあって直接そのNを修飾する構造 AN A 型がある。この場合、後置される形容詞の大部分は分詞である。以下に例をあげると、

soche swete meditations touchid before (29) soche a priue loue put vpon  
pis cloude of vnknowyng (34) a meek soule leuyng in pis deedly body (42)  
a nakid entent streching into God (135) no specyal synne wretyn per-apon

5) このことは Chaucer の場合と全く同様である。Cf. T. Miura, “Arrangement of Two or More Attributive Adjectives in Chaucer (1),” *Anglica* Nos. 1-2 (October 1966) pp.3-4.

に多少異なる。例えば現代英語で ‘a black and a white dog’ と言えば、白と黒の二匹の犬を意味することになり、白黒まだらの犬の場合には後の冠詞をつけないのが通例である。ところが ME ではこの場合通常、同一の指示物の属性を同時に表わす。

このことは次の文を見れば明らかである。

pan wol pee penk it a wel heuy & a ful peynful birpen of pi-self (157)  
And whan he entred in to the chapell pat was but a lytill t a low thing  
(M90)

つまり、初めの文においては代名詞 ‘it’ が使用されており、次の文においては先行詞が単数名詞 ‘chapell’ であるということから、二つの形容詞は明らかに単一物を修飾しているということになる。

次に一つの限定詞が A&AN に先行する型であるが、手元の資料の中には不定冠詞の例は見られない。

pees vnsemely & vnordeinde contenaunces (99) peire bodily & goostly enemyes (94) pi bodily & goostly enemyes (13); any bodily or wordly ping (35) any corious or special beholdyng (139)

最後の二例は接続詞が or の例である。

この他、大体において N が複数形の場合であるが、何らの限定詞をも伴わない型がある。

dispitous & reprouyng pouztes (37) hidous & wonderful sorow (45) diuerse & wonderful variacions (86) bodely & fleschely conseytes (94) grete & horryble synnes (104)

この場合には二つの形容詞は、しばしば別個の指示物にかかるのか、あるいは同一物にかかるのかは不明瞭ではあるが両方可能である。例えば次の例では明らかに別個の指示物を表わしている。

3it es per adyuersite by-twix gastely & bodily dedis (R37)

1.2.2. 上記 A&AN 構造に前置形容詞が更に一個加えられた AA&AN もしくは A&AAN の型もふつうに見られる修飾構造である。

AA&AN: a proude, coryous & an ymaginatiif witte (22) he will bryng to pi minde diuerse ful feire & wonderful pointes of his kyndnes (27) pees corious lettred or lewed men (2) pis feinid bestly & not goostly worchyng (86) pees corious lettrid ne lewid men (130)

A&AAN: a deuoute & a meek blynde stering of loue (22) a stronge & a deep goostly sorow (83) a pleyn & an open boystous voice by kynde (101)



ers' とよばれる語と 'to 不定詞', 節, 更に 'such' を除いたものである。これらのものは語順の観点から見れば極めて固定的であるので 関連箇所以外は便宜上省くことにする。

1.0 まず, 対象となる複数の名詞修飾語 (以下, 必要に応じて A と略記) が名詞主要語 (以下, 同様に N と略記) よりも前の位置に置かれる型について見てみると, 大別してその修飾構造の中に接続詞 (普通は 'and') を含まないものと, 含むものとに分けることができる。

1.1.1. 一つの N に対して二つの A が直接並置される AAN 型は頻度から言えば他の型に比べていちばん高く, それは標準型 AN からして当然といえよう。この場合, 二つの A は N に対して, 互いに等位関係を有する場合と, 従属関係にある場合の二様が可能である。

soche a proud, corious witte (22)<sup>4)</sup> soche a scharp sotil pouzt (33) suche a nakid sodein pouzt (35) pis louely blynde werk (144)  
that euel purposed matirs (L210) a full faire zonge womane (R5) a blisfull heuenly sown (R18) a low lityll dore (M49)

1.1.2. 上記の型に更に A が積み重ねられた AAAN 型も見られるが, この型になると頻度は激減し, わずかに次の二例だけで, いずれも *Cloud* のもので, 他のテキストには見られない。

a scharpe double-eggid dreedful swerde (68) pees zonge presumptuous goostly disciples (105)

1.2.1. 次に N に先行する二つの形容詞の間に接続詞 'and' が介在する型 (A & AN) について見てみると, まずこの場合, 先の AAN 型が等位・従属両方の構造を含むのに対して, 二個の形容詞は N に対して互いに等位の関係にあるという違いがある。これは更に形態的に限定詞との関連から三つの細区分が可能である。

まず, 二つの形容詞が共にそれぞれ限定詞 (主に冠詞) を伴って N にかかる場合,

a softe & a demure contenaunce (87) a good & an acordyng wil vnto God (92) a symple & a lizt lesson of a lewid man (137) pe wonderful & pe special loue (56) pe rude & pe grete steryng of pi spirite (87)

この型は ModE でも普通に見られるものであるが, ME においては意味的

---

4) 例の末尾の括弧内の数字は頁を表し, *Cloud* 以外は数字の前に上述の略号の頭文字を付す。

# ME 散文 *The Cloud of Unknowing*

## における名詞修飾構造

杉 山 隆 一

通時的見地から英語の語順の問題も数多く論じられているが、名詞主要語に対する修飾構造の構成要素間の語順に限って見れば、大雑把な言い方をすれば、「ゆうに千年以上このかた変化はない」<sup>1)</sup>ということになる。つまり、OE における *ealle his leofan halgan, manig oper god man* はそのまま現代英語の語順なのである。

ところが、その修飾構造そのものに目を向けると、それは決して単一で固定的なものではなく、一つの名詞（主要語）にかかる限定形容詞の数が複数になるとその型に色々な変化が見られる。またその変化には、当然、リズムや韻との関係が大きく関わってくることからして、韻文と散文とでは変化の度合に差が生ずることが考えられる。そしてその差が韻文の技巧性ということになるであろう。

そこで、ここではまず ME 後期の代表的な散文の一つである *The Cloud of Unknowing*<sup>2)</sup> を中心に、比較の意味からやはり同じ頃の散文を他に三つ選び、<sup>3)</sup> 限定形容詞の、主要語に対する配置の構造について記述することにする。

但し、ここで直接の考察の対象とするのは限定形容詞の働きをするものの中から、Fries の言う ‘function words’ の A 群に属する、いわゆる ‘determin-

---

1) I. A. Gordon, *The Movement of English Prose*, (London: Longmans, 1966), p. 26.

2) この散文について Gordon は次のように書いている。“The tone is conversational, and the vocabulary everyday, but the sentences tend to trail... But in general his prose is more effective than that of his secular contemporaries, and with his fellow mystics he is in the central tradition of English prose-writing.” Ibid., p. 55 尚、使用テキストは P. Hodgson, ed., *The Cloud of Unknowing*, EETS, OS, 218 (本文中では *Cloud* と略記。)

3) R. W. Chambers & M. Daunt, ed., *A Book of London English 1384-1425*, (Oxford: Clarendon Press 1931). I から II (1389年) まで。G. G. Perry, ed., *English Prose Treatises of Richard Rolle de Hampole*, EETS, OS, 20. P. Hamelius, ed., *Mandeville's Travels*, EETS, OS, 153. Part First のみ。尚、本文中では夫々順に *London*, *Rolle*, *Mandev.* と略記する。